

派遣者番号	R7K09	氏名	内山 沙都
研究主題 —副主題—	校内授業研究の事後協議会における発言の阻害要因 —学校在籍年数が短く発言の少ない同僚教師の観察を通して—		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	渡辺 貴裕
所属	江戸川区立清新第一小学校	所属長	金木 圭一

キーワード：校内授業研究 事後協議会 同僚教師 発言の阻害要因

要旨： 本研究は、校内授業研究の事後協議会において、学校在籍年数が短く発言の少ない同僚教師の発言阻害要因を明らかにすることを目的としている。調査の結果、発言の少ない同僚教師は、同僚の意見を自分の中に取り入れながら自己内で深く省察を行っていることが明らかになった。しかし、省察内容をすべて共有していないことも明らかになった。その発言を阻害する主な要因は「自分の意見がその場の話題やタイミングに合っているか」という不安や配慮であったと分析される。学校在籍年数が短く発言の少ない同僚教師は、活発な議論が交わされる場において、協議の流れを優先して発言を控える傾向があった。また、自分の意見を同僚と比較し「大したことが言えない」と自信を失っている実態も示された。以上のことから、協議会を単に活性化させるだけでなく、互いの省察をじっくり聞き合う環境を整えることの重要性が示唆された。

1. 研究の目的

教師の学びの場として、研究者からは校内授業研究に注目が集まっている。しかし、教師は校内授業研究に対して、なぜ協議会を行うのか、と疑問に感じている。疑問視する理由として、事後協議会（以下、協議会）で何を話すことが正解か、どのような言い方をすれば授業者や周りの同僚教師との関係性を保持できるのかといった正解探しの時間となっていることが挙げられる。こうした状況を鹿毛（2017）は「同僚に対して意見することになるために遠慮がちになり、何気なくほめて波風が立たないようにする『配慮』や「必ずしも生産的ではない厳しい批判を授業者にズバッと投げつけて場の雰囲気を悪化させる」としている。

北田（2014）は校内授業研究において「協同で省察を行う」ことへの効果を「協同で省察を行う」ことで、「一人では気付けなかった新しい見方や考え方」を学ぶことが可能となり、自らの「授業を省察する視点の変化」し、自らの授業を改善していくことが可能となつた。そのため、協同的な省察を生み出すことを目的とした校内授業研究の協議会に対して、多くの研究が蓄積されてきた。中でも同僚教師の発言に着目がされてきた。そこでは、発言していない同僚教師の存在が明らかにされながら、どのような理由から発言していないのか、については言及されていない。

そのような発言を阻害する要因について、坂本（2012）は学校在籍年数と協議会での発言機会との関係から着目している。学校在籍年数に着目する理由として「協議会に参加する経験を重ねることで、学校内の教師文化としての授業に対する視点を共有することから、教師文化への習熟は、学校在籍年数を指標とする」ことを挙げている。その上で「学校在籍年数の長い教師は、発言機会と発言の意味内容が多く、発言の内容について、授業の問題点や可能性を指摘する発言が多いことが明らかになった。」とした。加えて「学校在籍年数の長い教師の発言機会と発言の意味内容の多さについて、協議会で学校在籍年数の長い教師に対し、短い教師が発言を遠慮している可能性や、学校在籍年数の長い教師が場を仕切っている可能性といった、協議会の場における権力関係の影響が考えられる。」とした。

そこで本研究は、学校在籍年数が短く発言する回数が少ない同僚教師に着目する。そのような発言回数の少ない同僚教師が、協議会中に他の同僚教師の発言をどのように受け止めているのか。また、同僚教師の発言から考えたことや授業における気付きを省察し、伝えるかどうかの判断に影響しているものは何かを明らかにすることを目的とする。

本研究の実施にあたり、都内公立小学校の協力を得た。学校在籍年数の短い教師（1～3年目）が複数名いた。そのため、協議会における発言の少ない2名の教師の思考過程を研究対象として設定をした。事前に参与観察を行なった結果、あいづちやうなずきといった行動をしている同僚教師としてH教諭に協力を依頼した。また、悩んでいる姿を多く見せる同僚教師としてD教諭に協力を依頼した。

2. 研究の成果

H教諭は協議会中、大きく3回発言をしていた。加えて、沈黙をしていた7分間において、同僚教師の提示した意見を基に自己内で省察をし、同僚教師とは異なる意見を持ったことが明らかになった。しかし、その意見を共有しなかった理由を「自分の意見を言うのが得意じゃない」からと話していた。D教諭は協議開始後すぐに発言した。一方、5分程度沈黙し、再度発言をした。D教諭は、5分間沈黙をしながら、同僚教師の発言を受け入れ、新たな気付きを得ていた。しかし、D教諭は自分の発言内容と同僚教師の発言内容を比較し、自らの発言内容に深まりがないと認識していたことがインタビューから明らかになった。加えて、より発言することを目指す参加の仕方をしたいと語っていた。これらのことから、意見が多く出る協議会であるからこそ、自分の中にある意見と同僚教師の意見とを比較し「大したこと言えてない」と捉えていることが明示された。その結果、同僚教師の発言から省察を得ても、共有するまでに時間がかかったり、共有しなくなったりしていると考えられる。

自分の発言内容のどの部分に対して不安感を抱いているのかを明らかにするため、インタビューデータに対するコーディングを行った。その結果、発言する内容が協議会のために提示された視点に沿っているか、その段階で話題になっているか、代案を提示できるかという3つの要因が見られた。中でも、大きく作用していた要因として話題に沿っているか、であった。つまり話題に沿っているかどうかを重視して、発言の有無を選択していたと言える。「自信がなくて」「みんなみたいに言えない」「大したこと言えてない」という言葉は、そのタイミングで話す最適な話題であるかに対する不安だと言える。協力校である公立小学校の協議会が意見を積極的に伝え合う場であり、その文化に適応しようとしているからこそ、話題に沿っているかを常に気にする配慮が発言の阻害要因になったと言える。

3. まとめと課題

これまでの校内授業研究の事後協議会に関する研究においては、学校在籍年数が短く、発言回数の少ない同僚教師に着目をされることは少なかった。それは、学校在籍年数が短い教師の発言回数が少ないのは、その学校の

文化に精通していないため、仕方がないものとして捉えられてきた。しかし、今回の研究を通して発言回数が少ないという事実と、省察を行っていないということは別であることが明らかになった。むしろ同僚教師の発言を聞いたことで、省察の対象が広がっていた。自分が見た授業の事実だけではなく、同僚が捉えた授業の事実を基に省察をしたり、同僚教師の出した代案を基にした代案を考えたりする様子が見られた。一方、その省察を共有する場合と共有しない場合とに分かれることも明らかになった。自分が発言しようとしている内容が、このタイミングで話す最適な話題であるかに対する不安が見られた。学校在籍年数が短く、発言回数の少ない同僚教師は、協議会において発言するタイミングを配慮しながら参加していたことが明らかになった。

本研究は、調査対象者の担当教科・学年と参観する授業の教科・学年との関係によって、阻害要因が変わる可能性がある。そのため、今後は対象人数を広げたり経年変化等による調査にしたりすることで、より詳細な阻害要因を見出すことができると考える。

4. 成果の活用法

協議会で同僚教師が考えていることを発言しやすい環境にするための示唆を得た。話題になっているかを重要視し、自己内で省察したことを発言できずに協議会が終わってしまうことがあると言える。協力校における協議会では同僚教師同士が活発に発言をするため、学校在籍年数の短い同僚教師は発言しにくくなっているという事実が見えた。そのため、協議を活発にすること以上に、同僚教師同士の意見を聞き合うことの重要性について考える必要があると言える。

参考文献

- 一柳智紀 (2009) 「児童による話し合いを中心とした授業における聴き方の特徴—学級と教科による相違の検討—」『教育心理学研究』57 巻3号、p368
- 鹿毛雅治・藤本和久 (2017) 「授業研究を創るために」『授業研究を創る—教師が学びあう学校を実現するために—』、教育出版、p4
- 北田佳子 (2014) 「校内授業研究で育まれる教師の専門性とは—学習共同体における新任教師の変容を通して—」『教育方法 43 授業研究と校内研修—教師の成長と学校づくりのために—』、図書文化社、p23
- 坂本篤史 (2012) 「協議会における小学校教師の教職経験が談話に与える影響—教職経験年数と学校在籍年数の比較から—」『協同的な省察場面を通じた教師の学習過程』、風間書房、pp66-67
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法』、新曜社
- 三宮真智子・山口洋介 (2019) 「発想に及ぼすあいつちの種類の効果」『心理学研究』90 巻3号、p303
- 姫野完治・相沢一 (2007) 「校内授業研究における事後検討会の分析方法の開発と試行」『秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学部門 第62集』、pp.38-40